

## 「さんわか」の活動をご存じですか？

野尻秀昭

東京大学生物生産工学研究センター

筆者は農芸化学会の「産学官学術交流委員会」の産学官若手交流会（通称「さんわか会」）の第2期メンバーとして活動が続けてきた。第2期の活動の詳細は、少し先の「化学と生物」で総括の予定であり、学会ホームページでも公表予定であるので、ぜひご覧いただきたい。本年度からは、14名の新任委員と筆者を含めた4名の留任委員で、第3期の活動を開始している。

農芸化学は「実学」であり、「産学連携」は当たり前である。学の研究者は基礎研究の発展した先に、常に「役に立つ」応用研究をイメージし、「研究のためだけの研究」に陥らないように注意する必要がある。「さんわか」の関係で会社の諸先輩方のお話を聞く機会が増えたが、「大学研究者が実学を目指さず、よろしくない」とおしかりを受けることが多い。まだ不惑前の筆者には過去のことはわからないが、大学の状況の変化は頻繁に耳にする。企業研究者の方の不満が、「大学や研究者の評価」での論文の偏重や、それに端を発した「よい論文に出やすい研究の増加」に飼い馴らされた大学研究者の昨今の姿から出たものであることは、想像に難くない。

ところで、若手の学官の研究者はどのように研究テーマを決めているのだろう。自身で研究の立案・資金獲得・遂行までやるのは少数で、多くは自由度が少ないことを嘆きつつも、上役の研究者の研究費の庇護の下で研究しているのではないかと。そんな自由度のない境遇では、そこからは出るための「論文になる研究」に邁進することになる。必然的に、チャレンジングな研究は生まれにくいし、実用的な観点の研究は敬遠され、社会からのニーズを気にする余裕は生まれてこないだろう。

そんな中で、「さんわか」である。その目

的は、「産学官連携を活性化するために若手が考え自発的に行動すること」である。2年の活動を終えて今思うに、「さんわか」の活動の最も大きな財産は、所属の異なる若手研究者がシンポジウム・勉強会などとおしてお互いに知り合えたことである。何か聞きたいとき、頼みたいときに、すぐ連絡し合える仲間が増えつつある。このような連携を積み上げていけば、「さんわか」の世代が先導的な立場に立ったときに、より多くの産学官連携研究を生み出せると思われる。

また、多くの研究者は大学でも企業でもとかく殻にこもりがちで、視野が狭い。そんな殻を破る刺激を与えてくれるのも、「さんわか」の大きなメリットの一つである。社会的にも学会からも評価が高い研究をするためには、幅広い知識はもちろんのこと、野次馬根性といってもよい貪欲な好奇心と若い行動力が重要である。今ある研究の深化は多くの場合「できること」であるが、安易な「できること」ではなく「すべきこと」をやるには、幅広い視点から研究の方向性を見直すことが重要である。そのヒントが、見過ごしがちな「実学」研究の中にあるかも知れない。

「さんわか」は学官の（学生ではない）若手研究者に産の研究者との共同研究を行なう契機を与える処方箋でもある。この意味で、大学院生や助教などの学の若手を中心にアカデミックな啓蒙の場を与える Frontier's シンポジウムとは方向性が異なる。この機会を借りて、今後の「さんわか」の活動に、農芸化学会に関わる多くの方々のご理解とご協力をお願いしたい。また、「さんわか」世代が、産学官連携の分野でどのような新機軸を打ち出すのか、その活躍を期待して見守っていただきたい。